
竜癒の姫と五つの竜

君祈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜癒の姫と五つの竜

【Nコード】

N8649Q

【作者名】

君祈

【あらすじ】

世界を渡り竜を癒し導く者を、「竜癒りゅうい」と呼ぶ。そんな竜癒として？統べる竜？に喚ばれるも、失敗すれば竜が滅んでしまうし、求愛されても命がけ！ しかも逃げれば、竜は寂しくて死ぬう？！お前はうさぎちゃんか！とつつこみつつも、やっぱりそんな彼らが愛おしい。

竜を救うため、現役女子大生が孤軍奮闘する物語。

ブローグ 〜愛する竜を殺すもの〜（前書き）

R15は保険です。現時点ではそういった描写が必要になる可能性のみですので、
どうかご了承くださいませ。

プロローグ く愛する竜を殺すもの

「寂しくて死ぬなんて、か弱い兎さんでも無理なのに……」
生まれて初めて目の前にした力強くも気高い竜の巨体を思い出し、それは無理だと私は思う。

私は今、一つ目の世界へ渡る前にと、 統べる竜 御自ら竜や世界について教えてもらっている。

その説明も、本当に説明する気があるのか疑わしいほど雑だが。それでも、もはや疑いようもなく？言うだけ？となっているさらさらとした言葉の羅列の中に、つい天然母との攻防で育て上げられたつつこみ根性が刺激されてしまった。

だって、竜が寂しくって死ぬなんて言うから。

「死ぬぞ」

「え？」

返ってくるとは思わなかった返事に反射的に顔を上げた。

と、まったく己の仕事に情熱のない教師のような？一応やることやっている感？満載で、丸めた尾にあごを乗せ音（ついに説明とは言えなくなった）を出し続けていた竜が、こちらを見つめていた。

そして私を喚んだこの竜、？竜の世界を統べる竜？は、オパール
の瞳で言い募る。

「愛しい者に放置されれば、寂しさか嫉妬で竜は死ぬ」

「……え？」

「ああ、嫉妬の場合は愛しい者も嫉妬の対象も死ぬかもしれないが
な」

うん、明日は暇だよ。あ、でも出かけるには天気悪いかもしれ
ないけど

こんなふうに明日の予定について話してたって、そんなに何気な
くはない。

あれ、そんな感じでいいの？

私の生死、普通に関わってるみたいなんですけど。

世界を渡り、竜を癒す人間を「竜癒^{じゅうゆ}」と呼ぶ。

そんなタイソウなものになることを受け入れた私は、もしも？癒し
？を失敗すれば、その世界の竜が滅ぶのも時間の問題という重すぎ
る現実を回避するために全力を尽くすつもりでいた。

ああ、でもそんな……。竜が私を傷つけることはあっても、私が
竜を傷つけることはないと思っていたのに。

小説や映画の中でしか会えない、最愛の存在。

こんなに強くて格好良くて気高くて大きくて美しくて少しだけ怖い、可愛い可愛い可愛い生き物を。

高層ビルのような体を小型化しても、私の腕では抱えられないほど大きな尾が私を包み引き寄せる。

透明な真珠のような、生きた宝石の鱗を撫でると？彼？は嬉しそうに喉を鳴らした。

それからそつと顔を寄せて鼻先ですり寄ると、低くも優雅な声で囁く。

「竜は、嫉妬で死ねる生き物なんだ」

お前の竜である、我もな　と、私の閉じた瞼に口づけて満足そうに笑った。

プロローグ ～愛する竜を殺すもの～（後書き）

あなたさまがこの作品を少しでも好んでくださったならば、心の底より、嬉しく思います。

1. 見上げるほどに大きな貴方は。

うん、わかるよ。あなたの気持ちはわかってる。

私もそうしたい。是非そうしたい。

竜がいない部分の説明は、すべて省きたい。

けれどそれはさすがにアレなので、私についてと現状に至るまでをこれくらいでまとめてみた。

1、名前。 山井^{やまい} 愛歌^{まなか}。 京都の大学に通う。 4月から大学2年になる。 弟と二人暮らし中。

2、主に関わる人物。 「極端な父」 「天然の母」 「癒しの弟妹」 「最強幼馴染」 「世渡り上手（親友）」

3、性格。 「無駄に世話焼き、気づけば渦中」（幼馴染様言）

4、トリップの経緯。 授業は午前のみのお休憩日、機嫌良く帰りのバスの列に並んでいたら地面が抜けた。

5、落ちた先。 一面、七色ウォーターオパールと真珠の世界。 と、思ったら巨大な竜の体に取り囲まれていた。

ん、十二分だ。 今日日^{きょうじつ}異世界トリップなんて珍しくもないし（二次元的な意味で）、愛しの竜もご登場だ。

なのでここから、回想をはじめたいと思います。

* * *

あ、そうそう。突然ですが皆さま、京都タワーをご存知でしょうか。

いきなり地面がすっこ抜けたことに驚いたのもつかの間、すぐさま何らかの平面に着地したことにまた驚いた私は、何故かその場でばたばたと足踏みした挙句すっ転んで尻餅をついた。

恥。まさに恥。パニックに陥ったとはいえ、自分でも意味不明すぎだ。

分厚い脂肪で大事無かった尻を撫で、せめて誰か一人くらいは笑っていてくれますようにと祈りながら手をつき立ち上がる……………え、なにこの床。

触れた手のひらから伝わる感触も、透明な真珠のような色も、完全に未知。

一着二百万円のベルベットワンピースに触り、一粒百うん十万の真珠を見たことがあるけど。（言うまでもないが。双方、断じて我

が家のものではない)

正直、比較にならなかった。

おいおい一体、どこの大馬鹿野郎がとち狂ってこの奇跡のかたまりのように美しい宝石を床にしようなんぞ思いつきやがったのか。

もはや犯罪に近い愚行への怒りにめでたく自らの痴態を忘れ、私は輝く床の終わりを探して視線を上げる。

上げて上げて上げて上げて、俯うつむいていた顔が真上を向いた頃。

京都駅中央出口のちよつと先から見上げた京都タワーくらいの大
きさの、竜と目が合ったんです。

2 . パニックに陥った私は。

京都タワーとは、何だ

虹色ウォーターオパールの瞳で見つめる巨大竜の第一声は、これだった。

あ、口に出しちゃった？とかは、頭が真っ白になるほど驚いていたから言えもせず。

だから私と竜のはじめての会話は、「えゝ確か高さは130メートルほどの京都駅前にある泊まれたり宴会やらができたりする塔のこと……」から、はじまった。

* * *

五分後、私はかなり頑張っていた。頑張り続けていた。

「私、去年近江から引越し京都の大学に通うようになりました、京

都駅も帰郷などに使うようになったのですが、しばらくはその存在に気づかなかったんです。入学から大分経った頃、大学の友人がたまたま「もっと大きいかと思ってたー」「え、あれ、電波塔じゃないの？じゃ、なんなの？」と京都タワーネタについて盛り上がってしまして。え、そんなもんあつたっけと思い、駅のデパ地下に幼馴染殿下のために高級ケーキを買いに行ったついでに見上げた所、なぜかやたら印象に残……」

尽きていた、もうネタは尽き果てていたんだ。

だって私、そんなに話せる程京都タワーについて知らないし。五分間のうち四分は、中にある100円均一の話で引っ張ってたからね。

しかしこの目的・ゴール共にわからない時間稼ぎにも、意味はあった。

日常について話していたせいか、私はかなり落ち着きを取り戻し、自分の置かれた状況を把握しようという心の余裕が生まれていた。

どうやら、この美しい宝石床は一枚辺り^{たたみ}畳十五^{じゅう}畳ほどの竜の鱗で（表現の単位になぜいまいちわからないはずの畳を選んだ私）、座っているのはこの巨竜が地面についている右手（前足）の甲の上で（この時点で私はかなり高いところにいることを知った）、その私を取り囲むようにジャンボジェット機もくしゃりと潰せそうな尾が横たわっていた（注釈が多くて申し訳ない。なんかぎゅうぎゅうにしないと心もとなく感じてしまつて……。それになんか頭がぼうつと……つてちよつと待て）。

おいおいこれ、心の余裕というよりただのパニックによる症状と脳貧血でね？

うん。心に余裕なんてあるはずが、わけがなかった。

だって、ねえ、フィクションであるはずの130メートルの生き物にガン見され続けているんですよ？

本来日本人とは、初対面の見知らぬ親戚に注視されただけで対応に困る生き物だというのに……！

あ、それと後で気づくんだけど、大変まずいことに私の心と口が直通なものも、改善されてなかったのよね。
その結果。

「ってしまつて……、あの、触ってもいいですか」

気づけばすると、欲望がダダ漏れていた。

2 . パニックに陥った私は。（後書き）

鱗の大きさについて計算していただいたのですが、愛歌は間違っていました。本当は、10 畳くらいです。（たぶん）
ご指摘、本当に有難うございましたっ！

3 . 地面から現れたのは。

? 触ってもいいですか ?

うん、言っちゃったね。言っちゃったよ? 私。

でもそれはもう取り返しがつかないことは、小娘とはいえ生きた約二十年間でわかってるから、もういい。死ぬまでに一度は見たら良かったのになと願っていた竜が目の前にいることに^{たが}驚が外れ、ちよつと畏まったお触り希望をして私の変態ぶりがバレてしまったことも、もういい。

もういいんだけど、ただなんかさっきからやたら目がおかしいんだ。

遙か上空にあった竜の頭が。気づけば、大きくなってるんだよ。

しかも、頭は、どんどん膨らみ続けて……。

あ、違った。

なあ〜んだ。そりゃ、そんな馬鹿なことが起こるわけないよね。ほら、ただ近づいて来てるから異様に大きくなってるだけじゃん。遠近法だよ、遠近法。絵を描く時にも使われる技法さ。あ、そうだ。ねえねえ。

——— これって、大丈夫なの?

高級オパール瞳は、まだ手も届かない距離だというのにも
う巨大なステンドグラスのように大きくなっていた。己が触りたい
と願ったから近づいてきてくれていることに、完全恐慌状態に陥っ
た私は気づかないという大変な身勝手さを発揮し。

けれど、潤んだ鏡のようなその瞳に私の全身がはつきりと映し出
された時。

まるで、冷たい宝石などではなく生きているということを証明す
るかのように虹彩が七色にゆらゆらと輝きはじめ、それがあまりに
も美しすぎて夢か幻かわからなくなった私は。

その存在を確かめるように、手を伸ばしていた。

煌めく鼻先に、そつと指が触れた瞬間。

突然ぱんつ！と、恐れや不安や動揺やパニックやそれらが引き起
こしていた緊張も貧血も手汗も、まるで全て弾け飛んでしまったか
のように消えてしまった。

（ああ、……なあんだ。この竜ひとがいれば、私は大丈夫なのに）

？彼？という存在が私にとってどういうものかを、頭とかそーい

う説明できる一部分ではなく、私の「心・体・魂」で理解した。そんな感じだった。本当の意味で世界を越えたのは、この時だったんだろうと思う。

とにかく私は、急に怖がっていたことがとても滑稽に思えて、くすくすと笑い出した。

懐かしさに似た深い安堵に包まれて、強張っていた体の無理な力を抜き、思わずついた溜息と共にくたりとしながら。

私は全身で彼に寄りかかった。

「びつくり損……」

両腕を広げて、冷たくも温かくもないまるで体温がないような不思議な肌を抱きしめる。怖がってごめんね、の気持ちを含めて。

……まあ、それはどうやらお互い様っぱいけど。

あと、私はこの近さだとただの垂直の壁に張り付いている人にか見えないだろうけど。

でもそれは、床に座り首を伸ばした状態で約130メートルの生き物と154センチの生物の交流としては致し方ない。

実際、こうして触れていられるなら気にならないから忘れよう。

のんびりと滑やかな感触を楽しむように両腕を上下に動かし、微笑みながら輝く瞳を見つめる。

すると、波打つようにさらにたくさん色がその中に映る私を包

み込んだ。

その反応に私はまた笑って、鱗に頬を当て、それからそっと口づける。

お前の手は、冷たく……………唇は温かい

もそりと、しっとり甘い声でそうつぶやいたかと思うと、私の唇から移った体温が波紋状に伝わっていったかのように、触れる鱗がふんわりと温かくなった。硝子のようにどこことなく無機質だったそれは、今はじめて息づいたかのようで。

たぶんこれ、顔が赤くなってるんだよね？

私は声を上げて笑い、あやすようにもう一度彼に口付けを落とした。

これが、私たちの本当のファーストコンタクト。

* * *

うん、そうそう。ちなみに。

この後急にこの竜様が お前は京都タワーが好きか とおっしゃるので、私が日本人らしく、
「え、あ……まあ、よく知らないし嫌いというわけでもないといった感じの……」
うんぬんかんぬん、と続けていたら。

地面から、いきなり生えました。キョウトタワー。

3 . 地面から現れたのは。(後書き)

私は決して京都タワーの回し者ではありません。

もうこのネタから離れたいのに、なぜこうなる……。

というか、京都タワーを知らないお方には本当に申し訳なく思っております……

知っておられる方には、勝手に親近感を送り付けたい！

4 . その口づけの意味は。(前書き)

この作品が、少しでもあなたさまに楽しんでいただけますように

4 . その口づけの意味は。

まず、生えたものには丁重にお帰りいただきました。

それから、突如彼が起こした暴挙にその目的をやりわりと問いた
だした所、私の住む場所が必要だと思ったとのこと。彼が使った？
住む？という言葉に「え、一旦帰ったらいいだけじゃないの？」と
も思いましたが、この？私と彼とあとは真っ白な床がどこまでも続
くだけの世界？には確かに椅子やら机やらの生活感ある場所が必要
だろうと、お茶や軽食を作る規模なら何がいいのか私は悩みはじ
めておりました。

しかし、私の竜様はこんなことを聞いてくださったのです。

ではお前が、そちらの世界で好きな建物はなんだ？

反射的にぱっと思いつき、「あ、ヤバイ」と思った時にはもうア
ウト。地面からずるずるとモン・サン・ミッシェルの上にシャンボ
ール城を乗せたような、敬愛すべき名立たる世界遺産が大変お勞し
い姿で生えてしまっておりました。いたわ

てか、世界一好きな場所と今一番行ってみたい場所を二つ同時に
思い浮かべたとはいえ、私の頭の中は一瞬でもこんなことになっ
ていたのだろうか……。お願いだから違うと言って、竜様。

超巨大竜の身長さえいくらか越えたその建物に「こんなのどうや
って使っていいかわからない。むしろ、使用不可能に思われる。う

ちの家くらい小さなものに変更を希望したい」とは口が裂けても言えず。

だってこの竜様、私が好きなものをあげたくて仕方なかっただけなんだ。

ちなみには、？実際に行った事がある場所とそうでない場所？
？ゴシックやその他のいろいろ様式とフレンチ・ルネッサンス様式（
幼馴染殿下から説明を受けたがほぼ忘れた）？が混ざり合っていた
ため、なんかよくわからんことになってましたとさ。

* * *

「紅茶にお茶菓子、塩気のみ。あと、忘れないようにメモ用紙。
これでゆつくりと話せるよね。じゃあとりあえず……えへへ、私か
ら自己紹介を……」

カオス城のモン・サン・ミッシェルの下部の入り口近く、何度
か食事をいただいた見覚えのあるおばあちゃんの絵が描いたレスト
ランに懐かしさを感じ、移動先に決め。

私が人の相談に乗る際できるだけ用意する黄金の三点セット（気分と嗜好により紅茶を珈琲へ変更も可）を、物は揃うも誰もいない調理場を異常に申し訳ない気持ちになりながら使用し用意して。

正直現状についてまる一日質問していられる程聞きたいことは山積しているにも関わらず、人に身の上を聞くならまずなんとやらの精神で誠意を表そうとしていたというのに。

「お前について、我がお前から聞くべきことがあるとは思えんが」

私の誠意真つ二つ！ いやいやその前に、乙女として聞き捨てならん、ならんよそれっ！

お城に入るため小ぶりの象くらいに小型化して、その口で直接話しはじめたと思ったらあーた、いきなりそれかい！

「……そんな顔をするな。我はお前を悪い様にはしない」

「知ってるけどそれとこれとは別なの！ 自分だつて？ げへへ、竜ちゃん。お前のことは俺の方がよく知ってるんだぜ？ とか言われたらやでしょ？！」

「我はそんなことは言っていない……」

椅子に座った私を上から見下ろしながら、不満そうに尾を揺する。

あ、駄目駄目、椅子が飛んでくからじつとして！

天井だつて彼にとってはぎりぎりでも窮屈なのはわかるが、例え本物じゃなくても私には思い出の場所。ぶんと振られた尾の前に慌てて飛び出し、叩き伏せられそうになった椅子を両腕で庇った。

とたんに、ぴたりと彼の全身の動きが止まる。

「わかった、わかったから落ち着いて。私もなんで知ってるのかとか目的をちゃんと教えてくれたら、もう怒らないかあわわ！って、何っ？！」

こういうことは折り合いが大事と私の折れ所を提示していたら、抱きしめていた椅子ごと大きな尾っぽに包まれた。それは卵にだって傷もつけられないような優しい力なのに、重い木製のアンティークチェアと仲良く引き寄せられてずるずると移動した。

「お前は、その椅子が大事か」

彼の前足の間まで来ると、真上から至近距離で覗き込まれ突然真剣な瞳で問われた。

よくよく考えずとも、林檎が好きか嫌いかといったような取り留めのない問い。しかしその結果が後に、ばっちりと功を奏したり奏せなかったりするんだけど。

とにかくこの時私はなぜかとても重要なことを聞かれている気がして、一気に動揺も非難も収まってしまい、ただ素直に答えた。

「うん、大事だよ。　とても、大事」

それに竜はこくりと頷き、言葉を胸に刻むように静かに答えを返した。

「……そうか。ならば、我もお前が大事にするものを守ると誓おう。その代わりに、お前も我の大事なものを損なうな」

「——……わかった、約束する。貴方の大事なものってなに？」

彼が守ると言ったら、全力で守るだろう。それがわかるから私も、その誓約に応える覚悟をもって問い返した。けれど、人がこんな真剣に聞いているっていうのに、竜様はゆっくりと口の端を釣り上げて。

小さく笑って、私の瞳に口づけた。

何度も繰り返されるそれは、何かと思いつつも真剣に答えを待ち続けていた私が痺れを切らして美しい鱗に覆われた顔を両手で挟んだことで、止められるも。

お前だ、まなか愛歌

生まれて初めてのシンプルかつ真っ直な愛の言葉に撃沈した私には、だから、もう振るう尾の前に飛び出すことはするな という戒めは聞こえていなかった。

そして。閉じたまぶた瞼さえ真っ赤に染まった私に降り続いた？瞳へのキス？の意味が、彼という竜にとって求愛であることは、ずっと後になってから知ること。

4 . その口づけの意味は。(後書き)

次回も、19日へ日付が変わって10分以内に更新したいと思います。

末尾ですが、あなたさまがお読みくださることが、私の更新力の礎です。

心からの感謝を。

君祈

5 . 雄叫びを上げたのは (前書き)

書き直しました。再。

5 . 雄叫びを上げたのは。

私たちが生きるこの場所以外にも、たくさんの世界がある。

その様は多種多様で、いろんな生き物がいたりいなかったり、魔力や念力やその他のエネルギーがあつたりなかったり、肉体などの活動の器さえなしに存在出来たり出来なかったりする素晴らしい千差万別ぶりが、当然のこととして許されている。

そしてその無数に存在する世界を、？竜の有無？という篩ふるいにかけた時。

残った約128万6700の世界を統べているのが、私を喚よんだ竜。

* * *

● 「竜癒りゅうゆ」とは、世界を渡り竜を癒し導いて、選ばれた世界の竜を

救う存在。（地球から選ばれることが、今の所最も多い）

●「統^すべる竜」とは、竜癒になる者と救うべき竜の世界を選出し、その召喚と補助を行う存在。

●代々いろいろな人（救う竜の世界に合わせて人でない場合もある）が竜癒として選ばれており、今回選ばれた私が行くべき世界は、まさかの三つ。

●世界によって、竜が置かれる状況や文化・環境、竜の持つ考えや価値観は異なる。竜癒の存在を知っているか否かも。（重要！私が行く世界についての情報を、後でまた聞く事）

●竜の力は、魔力念力等の目に見えないものから物理的な接触に至るまで、私に害がある場合は無効となる。（え、何それ。試してみたい） 例外もある。（危なっ！）

●この白い世界は、統べる竜と竜癒のためのもので、私が世界を渡る際には必ず一度ここへ戻る必要がある。

●竜の数え方は、一つ、二つ、三つ……。 （トリビア！）

とりあえず。

？自分はなぜここにいるのか？？貴方の役割はなんなのか？思いつく順で質問を繰り返し、その答えを箇条書きにしていた結果、こんな感じになった。ちよくちよく、豆知識やら感想やらが混じったりしているが、どうぞ私しか読まないし、後で読み返した時こういうのがある方が好きなので問題はない。

そして今までの楽しいな雰囲気から一転、深呼吸を繰り返し心を鎮め、ぐっと腹の底に力を込めて覚悟を決めた私がたった今問うたのは、？癒しに失敗すれば、どうなるのか？

「失敗は起こり得ない」

最悪の結果を覚悟して息を詰めていた体から、ほんの少しだけ力を抜いた。未だ体に巻きつく尾を撫でて、私の気持ちを読み取るように瞳を覗き込む竜に笑顔と共にその続きを促す。

「お前は、竜癒だ。存在そのものが、竜を癒す。さらにお前が行く世界は、お前という存在が関わることで事態の好転が成されるからこそお前を必要としている。……お前が心配するようなことは何もない」

静かに、統べる竜は言い切った。そんな彼の言葉に、嘘はない。けれどこの質問までは淡々と答えていた竜が、答えに刹那戸惑ったのを私は見逃さなかった。

そして、見る間に感情豊かになってゆく彼の、私を思うが故の気遣いが滲む目も。

だからこそ、私は受け入れなくてはならない。

「わかったよ、ありがとう。だから、もしも………もしも、失敗したらどうなるか、教えて」

私のためにたくさんの感情を覚えて変わろうとしてくれる存在のために、これから出会う、かけがえのない存在になるだろう竜たちのために、私は自分がすることの結果とその責任をちゃんと受け入

れなくちゃならない。

だから教えて、私の竜。

「……万が一失敗すれば、時間の長短はあるものの、いずれその世界の竜は滅ぶ」

痛みと恐怖を共有するように、苦しげに彼はつぶやいた。

ありがとう。やさしいやさしい、大事な竜サマ。

でもね。大丈夫。私、そんなに弱くないよ。

「……わかった。なら、どういう状況がその万が一を引き起こす原因になるの？」

「……………、お前がその世界の竜を救うことを諦めた時だ」

すんなりと「滅ぶ」という言葉を受け入れた私の答えにぽかんとした竜を撫でて、私は笑った。

「——なら、そうならないように努力しないとね」

暗いことばかり考えても、私しか出来ないなら、やるだけ。

これからもつと愛しくなるだろう竜たちを放って逃げるなんて選択肢は、もとより私にはないのだから。

そう。だから。恐怖も不安も戸惑いも怯えも、引き連れて。

私はやれることを、やるだけ。

「あ、でももしも救う世界の竜が億単位でいたら、どうやって全部助けるの？」

腹を据えた私を眩しそうに見つめていた竜は、包みこむように長めの首を動かし額を私の首元へ当てた。

それから、ふわふわと満たされたような甘い声で、問いへの答えを歌う。

「心配するな。お前が癒すのは、その世界の竜の未来を良い方へ向けることのできる竜、すなわち——だ。結果、その竜一つを救うことですべての竜を救うことになる」

あれ。なんだろう、今の言葉。聞いた瞬間いくつかの言葉が浮かんだけれど、どれも当てはまるようできて、どれもじっくり来ない感じがする。

？大切・きっかけ・要・未来・結末・主・開花？それから……。

「——が聞こえないか？」

頬に手を添え、知っているのに思い出せない答えのようなもどかしさに悶々^{もんもん}としていた私は、申し訳なさに俯き頷いた。

「ごめん……」

「いや、問題ない。実際に——に会い触れることでその本

質を理解すれば、明確に言語化されるだろう。我はお前が持つ言語で話しているが、本来は言葉を持たず存在そのもので交信する。お前には 竜癒 は？竜癒？と聞こえているだろうが、それはお前の意識がその存在の本質をお前の価値観に当てはめた結果だ。三百八十二代前の日本の女は、「竜慰者^{りよういしゃ}」と呼んでいた。……お前にとっては、慰めることよりも癒すことの方が大切なのだろう」

確かに、私は？慰めと癒し？は別のものだと思っている。例えばもしも私に何かできるならば、誰かにとって慰めよりも癒しとなる事の方が何十倍も幸せだ。本当に、難しいことではあるが。

「そっか……そうだったんだね。じゃあ、一つ目の世界で目的の竜に触ればわかるようになるのね。了解です！ よし、なら次の質問」

優しい竜の言葉に応えて元気になった私は、シリアスも吹き飛ばし笑顔でペンをくるりと回してさっきまでの質問に戻った。それに安心したようにふわりと笑って、彼は小さく頷く。

「えーっと、向こうに帰るにはどうしたらいいの？」

「……………帰るのか…………？」

うん、溜めたね、たつぷり。

てか満足げだった様から一瞬で、その寂しがり屋の子犬のようなオーラをどうやって出した！ 日本刀だって鱗で折れる厳つい羽根付き西洋ドラゴンのくせにいいい！

駄目、駄目よ愛歌。惑わされては駄目。たとえ、私を包んでい
る尾っぽがものすごくふるふるし出していたとしても、「あ、じ
ゃあ今晚くらいなら泊まっていっても……いっかな」なんて、許し
ませんよ！

そんな朝チユン前によくある展か……あ、ちよつと冷静にな
った。

あまりの自分の阿呆さにいささか引くことによつて落ち着きを取
り戻した私は、首をのばして擦り寄つてきた竜様の喉元をあやすよ
うに指先でくすぐった。

もちろん、私だつて竜様が嫌で離れるわけじゃない。けれど弟と
二人暮らしアンド家事担当の私は、夕方にはばつちり帰らなくては
ならないのだ。まだまだ聞きたいことも、考えなくてはならないこ
ともたくさんあるけど、家にだつてやることはある。

まずは、それをちゃんと伝えないと。

「うん、とりあえずそろそろ一旦家に帰らないと。お夕はあああ！

！！」

「っ！　なんだっ？！」

耳元で突如奇声を発せられ、美の権化のように壮麗な竜は怯えた
ようにびくりと身を竦すくませた。けどいま、そんなの知らん。

「なつてこつたい、お夕飯の買い物、まだしてないじゃん！　忘れ
てるじゃん！　昨日家にあるもの食べ尽くしちゃったのにいいい！」

ああ、変な量残っていたお肉も野菜室の珍妙な残骸（これは決し
て私のせいではない）もきれいさっぱり使い切つて「おつ、財布の
小銭が丁度なくなった！」的な快感にうっとりしていた昨日の私を
罵りたい。何か、残しとけええ！　ああ、あとバスで今日の献立考

えるのもしてな……で。

「で、で、で、で……」

で、で、で。

「で？」

おっと、顔がすーすーする。私知ってるよ！これ。血の気が引いて顔が青くなると、こんな感じになるんだあ。

あと、「で？」って聞き返しながら首をかしげた竜様、君、ちょーかわいい。

「でんかぁーと待ち合わせええええ！！！」

5 . 雄叫びを上げたのは。(後書き)

マナカ、ほんとにはしっかり者のはずなんだけど……。

最強の幼馴染(通称、殿下)は、いつ頃登場できるだろう？

「空の冷蔵庫、まとめ買い重い！ 重い殿下持つ、私料理作る！」
「……その片言は現実逃避の一種か」

こんな感じで恐慌状態に陥ってただけど（ここに来てからそんなんばかりだな）、半眼になってこちらを見つめる竜様に白界（はくかい）竜様へ質問中？こつちの世界？とか？あつちの世界？とか指示語がわかりにくかったので、白い世界をそのまま名づけました）じゃ時間が流れないこと（へえーそりやすごい）を聞いて徐々に落ち着きを取り戻していききました（ねえでもなんかこのぎゅうぎゅうじゃないと落ち着かない症状に見覚えがあるんだけど……）。

しかし、とにかくまずは。 どうして私がこうなってしまったのかを説明しなくては。

「殿下怒る、怖いっ！」

あ、やっぱりまだ駄目じゃん。

＊ ＊ ＊

伏見 蒼夜^{せいや}、こと通称「殿下」。

私は、日に五回ほどこの渾名をつけた幼い自分を褒めてやりたい
と思っている。

小学1年生の夏休みも、もう終わる頃。保護者さんの仕事の都合
で隣りに引越してきた同い年の少年は、？とんでもない？が標準
装備の恐ろしい奴だった。

記憶力の悪い私が今でもはつきり覚えている。

宿題の追い込みがあるつてのに母親に呼ばれ、むっとしながら玄
関のドアを開けた。外は最も暑い13時の炎天下で、吹き込んだ熱
風が顔にかかって一気に汗がにじみ、田舎かつ庭に木があるせいで
耳が痛いくらいの蝉の鳴き声がわつと押し寄せた。けれど、手にし
ていた重いドアノブを押し切ったその瞬間に、夏空を割るような恋
の歌は突然。

ぴたりと、止んだ。

あれなんでだろ？と思い、原因を求めて顔を上げた私は、驚きす
ぎて固まった。

なぜなら。

灼熱の太陽に焼かれたアスファルトからの熱でゆらめく空気の中、

汗ひとつなくじつとこちらを見つめる？とんでもなく綺麗な男の子？に度肝を抜かれていたから。

それから、私たちは幼馴染になるわけだけど。

あんなに色白で綺麗で可愛かった赤銅色の髪のハーフの男の子は、？とんでもなく整った顔と長身の？？とんでもなく頭が良くスポーツができて？？とんでもなく家がお金持ちでその上仕事を手伝っては荒稼ぎする？という、もうとんでもなく嫌味な奴に成長した。

そして皆さま、想像してみて欲しい。

日ごと少しずつ可愛さが抜け凛々しくなってゆく男の子は、家の事情で我が家にほぼ預けられる状態になり、学校も食事もお風呂も寝るのも一緒。そして時と共に、繊細な少年美よりも角ばった線の雄々しい造形美へと変わってゆき、大きな手も高い身長も広い肩幅も低い声も、男の人のものになっていった。それを、一番近くで見続けた私は……。

慣れちゃったんだよ、驚異的美につ！ 毎日千度見てるから、普通になっちまいやがったよ！

あと、女友達がただでできづらかったかも察して！ 呼び出してほんとにあるんだぜ？

はいはい、そうとも。あんたは、見た目も頭ん中も貯金通帳の残高も完璧に育ったとも。

だけど、だけどなあ。 約束の時間に3秒遅れたら、嫌がらせで警察呼んで親に緊急連絡して搜索させた拳句とんずらするような奴なんか私はやだああああ。

「何？ 俺が悪いの？ ああ、確かに焦って中途半端に探した俺が悪かった。今度はちゃんとお前に連絡入れるし5分くらい待つよ。でも、5分1秒になった瞬間、ICPOだ。……文句ないな？」

ありますうう！ ごめん、私が悪かった！ 寝坊とか、ほんと申し訳なかったつ！ だから殿下、前に冗談でいじったら「どこの国のトップの所有物？」ってなったその、絶対にヤバイ非表示のナンバーを映している携帯の通話ボタンから手を離してえええ……っ！

「で、お前にとってその男はどんな存在なんだ」

竜様の低い声に、私ははっと我に返った。

己の記憶にムンクのように恐怖していた私を眺める目は、先程の半眼よりも見える瞳が狭くなっている。

それだけ呆れられている事実、一人演技をしながら回想していた私は慌てて居住まいを正し。

それから、考えてみた。

殿下が、ソウヤが、私にとってどんな存在かを。

「とんでもない寒がりで、秋口からマフラー巻こうとしたり体温高いくせに冬には人様の暖を奪って寝てしまうような変な奴。靴を揃えろと妹に怒られ、テレビのチャンネルで弟と争い、嫌いなキノコを母に笑顔で口に突っ込まれ、夏になると半裸族化する父と一緒に嬉々としてトランクスいっちょで歩き回る駄目な奴。それから……」

ソウヤがどんな存在か？ そんなの、簡単だ。

最強の幼馴染で、殿下で、困った時には頼れる兄で、意地っ張りの寂しがり屋の弟で。

「私の一番の理解者で共闘者。……大事な大事な、家族だよ」

愛しのお嬢様方、御機嫌よう。マナ力です。

突然ですが、私は今不思議な状況にいます。あ、そうだ。暇だしせつかくだからクイズ形式にしてみよ。

いち、私は今身動きがとれません。

に、体にはあるものが巻きついていきます。

さん、竜様が大いに関わっています。

はい、もうおわかりですね。答えは、「自分が聞いたくせになぜか私の答えに不機嫌になった竜（現在人型）に羽交い絞めにされているから」でした。

え？　なんでそんなに落ち着いているかですって？

いやあゝ、それには花も恥らう乙女にはおおっぴらにはできない深い理由がありまして……。

えっ？！　いやいや、人型竜様がギャップをねらって非常に可もなく不可もない顔だったからでも、私がどんな美しい顔でも竜じやなきや論外というヘンタイだったからでもなく……って、お嬢様。あーたそれどんな読みですか？　けれど……いい。そのヒネちゃった考え大好物よ！

ん？　ほんとのところ？　ああ、美形だよ？　さらさらと首までかかる透明真珠の髪に、涼しげな虹色ウォーターオパール瞳、白

磁の肌に通った鼻筋と厳かな口元という完璧な顔のパーツたち、長すぎて私の周りを二周するんじゃないか心配になる美しい四肢、アポロンの像よりも美を極めた肩や腹といった体（白いだばだば上下を着ているから腹は見たわけじゃないけど。……ごめん、ただの間違った推測です）、そして何より思わず平伏しちやいそうな神々しい雰囲気、人外級超絶美形だよ？

だけど、私はもともと彼を形というより「存在」でとらえていたから、人になったことにはそこまでの衝撃はなかったんだ。あれ、お嬢様も？ 「130メートルの竜が小型の象くらいになった辺りから、そうなるだろうとは思っていた」？ おお〜、やるねえ〜。伊達に乙女小説読んでないわよってか？

ふっふっふ、じゃあ次で決着を決めようじゃない。

問題よ。今までまともに好きな人さえできず彼氏もいなかった私が、カンガルーの子供か、招き猫に踏まれた小判か！ っていうくらいこの体格差で巻きつかれることに慣れているのは何故でしょう？

え、早っ！ 即答？！ しかも当たってるしい。くっそお〜敗北感……。

はいはいそうですよ、噂の殿下ですよ。でもって答えを正確に言っと、「実の親に捨てられた夜に一人で寝ていたら強盗に殺されたトラウマのある幼馴染殿下がうちに来たての頃一人だと眠れず不眠症で、私を含めた子供三人のベッドを巡回した所、恥ずかしがり屋ですぐに目を覚ましてしまう妹と、体重の乗った素晴らしい足技を繰り出す寝相の弟が選択肢から消え、私の隣に定着しやがった西洋文化圏の奴のせい」だね。

え？ 前半結構ハードな理由だねって？ うん、そうだよ〜。今も左肩から背中にかけてざっくり傷が残ってるくらいだからね。トラウマも完全には治りきってなくて、特に襲撃された日曜日の夜は未だに眠る前、すごく寂しそうな不安そうなお別れするみたいな顔をする。で、次の朝。隣りに私がいることが夢じゃないのを、ごつい腕でシメ技を使いつつ、俯いて目を閉じ額をすり寄せて確かめる。ああ、うん。わかってる。いい年した男女が、本当の家族でも恋人でもないのに、異常だよな。

だけどね。夢じゃないことがわかったと強張っていた体から力を抜いて、心底ほっとしたような、切なげに祈るような表情をするのを見ると。

私は、そんな汚名くらい喜んで着てやろうと思うほど、守ってあげたくなるん

「何を考えている」

ぎゃっ！ 首っ！ 首がごしゃってなった！ ごしゃってなったよ、お兄さん！！

なにい？！ きみ、急になにをするのお？！！

「お前……何を考えていた……？」

椅子に腰掛けた竜様の上に横座りにされた上に羽交い絞めも決められたまま放置され、意味がわからずぽかんとするのにも飽き、得意の妄想で話し相手を作って一人遊びで時間を潰していた。そんな私の顎を大きな手で掴むと高速で自分の方へ向けた竜様は、大事なことなのか二度同じ質問をし、……かなりご立腹のようだった。

うん、意味がわからないよね。全体的に。

「なにつて、いろいろだけど……。え〜、なんか……ごめん？でも他にすることないし。つて、こらこら。いくら私が西洋人並みにスキンシップが多い家で育ったからとはいえ、そんな目にばかりキスされるのは流石に……。わ、わかった。理由を聞くから、ね？ 教えて？ なんで無言で膝に座らせてたの？ わっわっ、待った！ ほんとわからにゃひんらつて！ らから、ほっへたつははいれ！ ……ぷっはあ。な、何なの一体。くっ……わからないこと自体がムカツクつか。つてやつか。弟妹の反抗期以来の苦戦だわ……。え？ ううんなんでもないよ。ふえ？ いや、他のことなんか別に考えてな……。あ」

しゃべればしゃべるだけ墓穴を掘っている自覚があるも、話さなきゃ状況は改善されないしというパロックスのただ中にいた私は、ようやくとこの意外と単純だった答えに気づいてほんと手を打った。
ああ、なんだ。

「他の人の話をしたり考えてばっかりだったのが、嫌だったのね」

誰だつて、一度は経験する感情だ。私だつて知っているし、私が親友の家に入り浸った時にはそれで弟妹の反乱にあったものだ。ああ……あの時の幼馴染殿下の策士振りと完璧なる指揮は……おつと。

今は。そんな自分の感情にたった今気づいたように瞠目して驚愕びっくわしている竜様のことだけ考えよう。

私は回された腕の中、全身で上へと伸び上がった。それから、まだこぼれそうに開いている七色の瞳の上、かかっていた真珠髪を左右に避けて真白の額にそつと唇を押し付けた。

お詫びとそれ以外の気持ちを込めて。

「これが、我が家の挨拶。もう、私にとって貴方も大事な大事な家族だからね、セイ」

7 . 我家の挨拶は。(後書き)

うげこれはひどいの方、いちお見てやってんぜの方、暇つぶしの方、まあ悪くないよの方、十二時過ぎ待機してくださる奇特な方、評価してくださる方、お気に入りしてくださる方。

そうそう、あなた様のことです。

あつ、あつ、ありがとうなんて、すっごく思ってるんだからあー
|! ! ! !|

「白界にいる間はお前の世界の時は流れていない。正確にはお前が世界を抜け出した時点でお前は世界と切り離され戻る場合は切り取られたのと同時点に送られている。したがって時間を操作しているわけではないため時間軸の移動は不可能だ。お前が他の世界へ移動する際は白界との繋がりが残されたままになるためその地での時間はお前自身に影響を与えない。またお前自身が時の影響を受けない限りお前の世界の時間も変化することはない。結果お前は他の世界で受けた身体的変化を蓄積することはないが精神的経験や記憶等は意識には時間が関与しないためお前の世界へ移動後も保持することができる。しかし白界を経ずに世界を渡った場」

日々休まず大量生産を成し得るベルトコンベアも真っ青の、見事な流れ作業。素晴らしすぎて、私ごときには言葉も意味もダダ流れた。

私、知らなかったよ。読点って日本の宝だったんだね。考えた人えらい！ えらいよあなた！ えらいから、この完全にご機嫌ナナメでそっぽ向いて機械音よりも抑揚のない呪文を唱えてる竜様の尊いお言葉にも、是非つけてやってくださいまし！

メモしようと慌てて持ったペンも、もう持っただけ。それどころか、揺らしてくねくねさせて遊んじゃうからね。

おゝい竜様、速いよそんなの聞こえないよ！ なぜなら君が、聞かせる気微塵もないからねっ！ 聞かせる気がない奴の話は聞か

なくてもいいって、お母さん言ってたっ！

時を遡^{さかのぼ}ることしばし。

額への家族の挨拶に、白磁の肌を真っ赤にさせた壮絶美形人型の彼ことセイは。

何故か突如、座っていた椅子を一瞬で粉碎しながら壮麗宝石竜に変化した。……ちよつと、潰されて死ぬかと思った。

それからは、上機嫌で透明真珠の体全体をなんとなく桃色に染めて尾を振る竜（なんやねんそれ、可愛すぎるやろ。殺す気？）にくつつかれながら、どことなく減ってきた小腹を満たすため、料理を作りはじめた。

裏の厨房をお借りし、あのバターの利いたふわとろオムレツは私には到底できそうにないので、いっそのことまったく違ったリゾットをかき回していると、視線の端で嬉しくて仕方ない犬のように揺れていた尾が何かを思いついたようにぴたりと止まった。

不思議に思って見つめれば、苦々しげに額に皺を寄せたセイ様と目が合った。

「マナカ、確認だが。……………お前の言う家族は夫か？」

うん、そりゃあ「は？　なんで？」って思わず言っちゃったのは悪かったと思うよ。

確認だ、って言ってたんだし、突然だったとはいえ、私がまさかそんな誤った解釈をしていないか苦悩顔してまで心配してくれた優しさに対して、もっと愛情のある当たり障りのない返事をする努力をすべきだったことは、反省しています。

だけどね、竜様。

だからって、厨房の壁をぶち破って外に飛び出し、追いかける（ちよっと壊したこと怒ったけど）私にばっちり背を向け無視して、竜の世界の説明音を出し続けて抗議するって、あなたそれ偉い竜様としてどうなのかな。

「次に各世界の竜についてだか先程説明した通り世界によって竜が置かれる状況や文化環境竜の持つ考えや価値観と竜癒の存在について既知であるか否かは異なるがおおよその共通事項はある。一つ竜癒 が癒すべき竜は各世界に一つ。二つ 竜癒 は触れた瞬間に癒すべき竜がわかる。三つ癒された竜は己と 竜癒 の存在を理解した後絆を結ぶことで世界を越え 竜癒 と交信可能だが絆を結んでいる間は 竜癒 が存在する世界の時間が少なからず影響する。四つ直接的なあらゆる竜の攻撃に対し 竜癒 は傷つくことなく食事の必要性も基本的にはない。万一白界と絆が薄れ病や疲労に陥った場合も白界に戻れば治癒される。間接的な攻撃に対しては無力だが、私の力を受けていけばその範囲ではない五」

やった、項目の数を言った後は、切れ目がわかってかなり聞き取

りやすいぞ！

慣れもあるだろうけどね。ぶちぶち文句を言いながらも、これでも頑張つて耳を澄ませていたんだから。

メモも、すらすらと進んでいる。しかしこのスピードについていくためには、字の汚さは掻き捨てだ。

とにかく今は得られる知識を全て吸収しなければと、私はさらに耳へと意識を傾けた。

「つ竜は愛する者が長時間離れそれが許容を超えた場合結果として命を落とすことがある。六つ竜」

え、なんだって？

* * *

——焦がれ続けた。

焔の如き想いが魂を焼き尽くす苦痛にも、気づかぬままに。

時の流れぬこの白の世界で、覚醒し我が？我？となったその狭間はざまから。

ただひとつ求め続けた、我だけの 竜癒。

願いの果てに時が満ち喚ぶこと叶った 竜癒 は、我の鱗の上でわたたと暴れ後ろへと倒れた。

人が落ちれば命はない高さに、恐れに硬直しながら右腕の全てに不可視の防護壁をかけた。尻を着く際硬い我の鱗に強く当たらぬようにもした。

しかし、 竜癒 は両手で顔を覆っている。

そのような所を打っただろうか。しかしこのか弱さでは、苦しんでいるかもしれぬ。

そう思った時、胸が張り裂けそうになる痛みと 竜癒 が小さき手で我を撫でるのを感じた。

慌て傷はないかとよく見つめたが、顔が幾分赤いばかりで損傷はないようだ。それでも不安が拭えずにいと、 竜癒 は俯き、我の鱗を大きく目を見開き凝視し確かめるように触れた。

我に、触れている。

業火のような焦がれしか知らぬ我は、溺れるような喜びを初めて知った。

竜癒 が、少しずつ顔を上げながら、我の腕から肩、首へと視線を上げて。

余りの喜びに、色づいてしまった我の瞳を見つめた時。

「京都タワーって、これくらい……だっけ？」

……京都タワーとは、何だ

我知らず、問い返してしまった。

8 . 思わずだったのは。（後書き）

竜様視点の出会いです。まだこの時は、少しだけ口調が違います。

実は思わず、でお互い会話をしていたふたりでした。

9 . **ブラックアウトの原因は。（前書き）**

やっと、プロローグを追い越しました。

9 . ブラックアウトの原因は。

?.....あの、触ってもいいですか？

京都タワーとは如何なるものか問うた我に、 竜癒 はこちらを見つめはきはきと答えていた。

愛しき者が、その瞳も声も意識も我に向けている。
湧き上がる喜びと愛おしさに求愛の七色が激しくなるばかりの瞳で、時を忘れ見つめていたが。

突然の言葉に、息のいらぬ不死で良かったとはじめて思った。

しかし、傷つけまいか恐れはしまいかと怯えるような想いで近づき、伸ばされた手に触れた時。

我は、不死ではなくなった。

くたりと鼻先に凭もたれたお前が、我を受け入れ、暖かいその唇で我に口づけたその刹那に。

お前を独り待ち続けた時間が？寂しさ？を抱え、お前に触れられぬ世界は不要だと感じるほどに？虚しさ？を含み、お前という存在に焦がれ続けた想いが？痛んで？いたことに、我は気づいてしまった。

想いを知り、？生きて？しまった我は、もう元には戻れない。

愛歌。 いつかお前の生が終わるその時、我もまた死を迎える
だろう。

不死の身ではなく、お前を愛する心が痕も残さず消え失せる。
愛する者のいない世界になど、竜には耐えられないのだから。

愛歌。 我の 竜癒 。

竜癒 とは、？役割？を表す名。 けれど同時に、竜の言葉は
その本質を、？存在？を表す。

統べる竜に唯一愛された者

* * *

目を開けると、真っ暗だった闇色の視界は、幻のように輝く七色に変わった。

嫉妬と寂しさで竜が死ぬと告げ、お前の竜である、我もなと妖艶に耳に囁き残し、瞳に口づけた彼は、楽しそうに喉を鳴らして私の黒い瞳を覗き込んでいる。

ああ、どうしてこう毎回突然なんだろう。

自分から望んで触れたその瞬間に、彼の存在を理解したり。

私が彼の鼻先に口づけた瞬間に、彼に真実心が芽生えたこととか喉を使って音にして、外界へと？彼？という存在の大切さを形にした瞬間に、彼の名を得たように。

ああ、どうして。

竜癒

？彼が私の竜？だなんて、今まで何度も思っていたはずなのに。彼の口からそれが出た瞬間、竜癒の本当の意味を理解してしまっなんて。

「 竜癒 。 我の、 竜癒 」

ああ、お願いもうやめて。

耳ではなく、私の？存在？で聴くそのコエで呼ばないで。

じゃないと、ほんとに顔から火が出る……！

「竜の我が語るのは、その本質。その真実」

ええ、そうでしょうとも。貴方は あなた をそのまま全て使って直接 私 に話しかけているんだもの！ 偽りも嘘もフィルターも婉曲も遠慮もワンクッションもあつたものじゃない。

わかった！ 今までのズレてた鈍感さなら、謝るから！ ほんつと謝るから、せめてこの上半身の赤色化を隠させてえ！

「お前はこれから世界を渡り、竜を救う。竜は、お前を愛すだろう。だが、忘れるな。真にお前の竜となれるのは、 我のみ」

最後の言葉を竜語にただけなのに、私は存在ごと揺さぶられた。

セイ、待つて。 私、もう限界超えてる。

私の愛情数値は今まで、家族愛か友人愛か人間愛か大型獣愛くらいしかなかったの。

だから。 私の人生かかったって受け取れ切れぬほどの恋情は。

お前に近づくために心を得、白石だった瞳を求愛の七色に変え、
お前のためには狂うことも厭わぬ、お前だけの竜である、……我の
みだ

ちらちらと揺れる世界は、七色だったのに。

私の頭のどこかで大きな衝撃音が響いた後は、またも真っ暗。

10 . とりあえずは。

「忘れるな。そちらの時間で三日に一度、白界へ帰ってこい。それだけ覚えていれば、あとは大した問題ではない」

「わかった。……………え、ほんとに？」

何か新しいことかつ重要なことを始める時、私はやたら前もって知識を欲しがるタイプだ。

勘は働く方ではあるし、一旦騒動に巻き込まれてしまえば持ち前の図太さをばっちり発揮するのでだいたいが取り越し苦労になるのだが、如何せん、性分だ。

キャパオーバーの感情を受け取るという現代科学では説明できない原因による気絶から復帰し、さあようやつとまともな説明が受けられると思っていた私は、大変残念な気持ちになった。

今から不思議の力で世界を渡るというのに、彼からこれ以上説明する気はないらしい。飛行機で国を渡る時だって、もう少し説明は長いのに。

「……………不安に思うことなど、ない。世界を渡ろうとも、我の力がお前を守る。もし問題があれば、我の元へ帰ればいい」

「わかつ……………あ、帰り方はっ？！」

気絶から目覚めたまま、人型セイの膝の上、横たわるように抱き

しめられていた私は慌てて飛び起きた。

もしかして私、帰り方がわからないまま渡ってしまうところだったんじゃない？

「落ち着け。帰りたいと思うだけで、帰れる。お前が恐れるようなことは何も無い」

「わ、……待つて。やっぱり、駄目」

忙しなく毎度ちゃちゃを入れる私を、セイはゆったりと見つめていた。

流石私から私のことを聞く必要はないと言い切った彼には、私の重度の心配性など大前提なのだろう。

家族をも時折苛々させる私の欠点でもあるので申し訳なく思うと共に、理解が得られているのは本当に有り難い。有り難い、けど。有り難い、からこそ。

「思うだけで帰ってきてしまったら、私、あつという間に逃げ帰っちゃうよ。心の中でぐちぐち言いながらじゃなきゃ、頑張れない情けない奴だから」

「……お前がその世界を離れた瞬間に、時は止まる。他の世界でどれだけ過ごそうとも、白界を経由する限り、時が動くことはない。多く私の元へ戻ることに、問題はないはずだ」

ふむ、なるほど。そんなシステムだったのね。うん、安心設定だ。って、いやいや、問題だらけだよ。時間が流れないからって、ひっそり心の中で愚痴るだけでいちいち帰ってたら全然話が進まない

じゃないか。

あとね、セイ君。君、ただ私にたくさん帰って来て欲しいだけでしょ？

「問題があります。ので、何か合図したらにしよう。合図形式にしてください。ん〜何がいいかな。……………手を五回叩いたら？あ、拍手で駄目か。普段しないことで……………口笛とか？」

「……………帰って来たらいいと、言っている」

お、諦めないね、竜様。しかも、もう取り繕う気もないし。

説明がほとんどない一番の理由は、変な先入観がない方がいいと
のことで、それを聞いた私は何でもまず説明を求めてしまう己の弱
さを恥じたものだけど。

つつい、それは建前だったのでは？と疑ってしまう弱さを私は
今発揮中だ。

「うん、ちゃんと三日に一度は帰ってくるよ。だから、口笛の合図
をしたら私をここに渡してね」

「……………わかった。そう誓詞^{せいし}を交わそう。……………これをもって行け」

ため息をつきそうなほど仕方なく承諾した後、これを、というの
で視線を移し彼の大きな手を見たが何もなかった。

不思議に思い顔を上げ、どれ？とセイに目で訴える。

と。ぽろりと彼の七色の瞳から涙が零れ落ちた。

「っ！ なっ、どうしたのセイ?!」

「瞳を分けた。この七色が薄れたら、我の力がお前を守りにくくなった証だ。すぐに戻れ」

「なっ、どっ！ どういう、いつ、痛くはないのね?!」

「……痛みはない。何故慌てている?」

「いきなり泣いたら当たりっ……………や、もういい。無事なら、それで」

「……そうか？ これは、首輪にした。身から離すな」

泣かれるのにほとほと弱く、その衝撃に精神的にぐったりとしていた私へ、竜様は七色に光る人差し指の爪ほどの宝石を突き出した。それにはすでに、彼の鱗のような透明真珠の鎖がきらきらさらさらと巻き付いている。

あんまり綺麗過ぎて、なんかもうよくわからない品だ。
だから、とりあえず。

「……有難う、大事にするね。でも、首輪じゃなくて是非とも首飾りと言って欲しい」

感謝に、どうしても聞き流せなかったことへのつつこみを添えた。

10. とりあえずは。（後書き）

連日災害現場が報道される、このような事態に投稿するなど間違
いだったのではないかと今でも悩み続けております。

しかし、まずは、とにかくまずはこの小説によって私の無事をお
伝えしたいという想いでおります。

その他は、もう言葉になりません。

何より、 なにより、 皆さまのご無事を祈ります。

君祈

11. あなたと私の目的は。

絹糸のように細い宝石を編んだような、透明真珠色の鎖がしゃりと鳴って私の胸元を飾った。その長い鎖の先、心臓の上には、七色にゆらゆらと輝くティアドロップ型の彼の瞳の欠片。

「よし、それじゃあそろそろ行くとしますか」

セイの腕から立ち上がって、着ていた紺色のワンピースの腰紐と黒のブーツの靴紐をしつかりと締め直し気合を入れた。

どんな場所に行くかわからないが、持ち物といえば、この身と大
学用のカバン一つ。ならば、気合だけはしかと持っていきたい。
…気も、大きく持っていきたい。

ふんとカバンを肩にかけ、腰にばしつと両手を当てた。
さあ、なんでもかかってこい。愛歌、いざ参ります！

「セイ、いいよ。がつつり送ってやってください！」

私の無駄に鼻息の荒い準備の様を、不思議そうに眺めていた人型
竜は頷いた。

「わかった。渡るのは一瞬だ、……落ち着いている」

その言葉は、どうやら私がここに来た時の慌て様を差しているようだった。

彼は私がまた転倒するのが心配、私はまた羞恥に悶えるのを回避、と二人の目的は違ったけど、望む結果は同じだったので、私はしっかりと頷く。

「では……送る。 竜癒 愛歌、気をつけて」

ふっと地面が抜けた。

着地したのはふわふわの床。長い毛の、一目で高価だとわかる真紅の絨毯の上だった。

よし。今度は、ちゃんと立っている。暴れたりもしていない。

ほんの一瞬階段を踏み外したような感覚を味わい、急激に早くなった心臓を押さえ我ながら小さい第一関門クリアに安堵した。

それから高級絨毯から視線を移し、18世紀のイギリス王宮のような室内を見つめながら深めの呼吸を繰り返して、落ち着きを取り戻そうと、

「おい、お前。何を呆けている。下級メイドは、集合の指示が出ているだろう。それに、何だ。エプロンはどうした。……まったく、これだから人間の召使いは」

突然後ろから掛かった声に振り向けば、映画でしか見た事ないような立派な執務机に座った男と目があった。

なるほど。目が合ったということは、誰か他の人に話しかけていたわけではないらしい。さて。じゃあ、なんだろう。私はお前さんのメイドになぞなった覚えは一秒とてないが。

そんなことを考えながらも、謂れのない非難にぼかんとしてしまった私を見つめうんざりしたように溜息を吐いた男は、手元にあった金のハンドベル、じゃない、呼び鈴をさも煩わしそうに鳴らした。

「わっ！」

ベルがその身を一つ鳴らしたと同時に、隣りに魔法のように現れた女性に驚きすぎて、私は思いつきり声を上げてしまった。

「……この女を、集合場所へ。それと、愚かにもないエプロンの代わりを。そうでなければ、辞めさせる」

「はい、畏まりました」

悲鳴を上げた私の反応を鼻で笑った少年と青年の境にいるような男は、ゆるく巻いた腰までかかる薄紫の髪を払いのけながら命じた。それに突如現れた、私と同じ紺色のワンピースに白いエプロンをした女性が静々と答える。

4秒ほどのその間。私の思考は、活発に動いていた。

落ち着け、考える、マナカ。

どんな時でも、状況把握が効率的な判断の近道になる。と、いつも言い聞かされて育ったではないか。

さあ、この場で最も良い身の振り方を今得られる情報から、引きずり出すのだ。

それと、毎度殿下からそう言い聞かされた……というよりできないから怒られてたという事実は、今は思考の彼方へ捨て去りなさい。……不安になるから。

「御用は、他にございますでしょうか」

「ない。この女と共に下がれ」

「畏まりました。失礼致します」

この会話の間に必死に頭を働かせ私が把握したことは、大きく五つ。

私がセイに送られたのは貴族的な階級だろう人物の部屋で、現れた女性を見ると今来ているワンピースがこのメイドの衣装に酷似しており、結果主らしき人物（繊細と讃えられる美を全て集めたような顔のナヨイ奴）は私をメイドと間違えエプロンがないと叱責し、そんな私を庇う気でこの女性は私を隠すように前に進み出、そしてこの男は？人間？を差別している？人間ではない存在？であること。

良かった。ここまで分かれば私がすることは簡単だ。

失礼致しますの声の後深々と礼をした女性に習い、私も礼を取った。

ここは一度下がって、この女性に相談するのが最善だろう。
私を男の視界から隠すように立つ彼女のすらりとした背を見つめながら、私は決めた。

ゆつくりと静かにドア口まで後退り、そこでもう一度礼をすると部屋を出た。

そのまま、わずかに俯きおへその辺りで手をそろえ可憐な様で歩く女性を真似る努力をしながら付き従う。

半分伏せたような目に映るのは、前を歩く彼女の長く美しい足と絨毯、そして壁際に置かれた壺や花瓶といった装飾品ばかり。しかし、いくつかの廊下を渡ると、絨毯も装飾品も目に見えて質が落ちていった。たぶん、3つ程棟も移動している。

私には確実にはけない細い黒の編み上げブーツが止まったのは、すでに絨毯も装飾品もなくなった廊下の突き当たり。いかにも古そうな扉の前だった。

「ここは、私の部屋です。中に入り、椅子に座ってお寛くわんぎくださいませ。私はこれから、月が真上に上るまで仕事がございます。調理台の右横にある食材は、召し上がってください構いません。お待ちたせし誠に申し訳ございませんが、帰ってきたら、お話を致しますよう」

何とも丁寧な口調でそう言うと、恭しく一礼を取り踵を反して歩き去ろうとする彼女を私は慌てて引き止め思い切り頭を下げた。

「あのつ、助けていただいて本当に有難うございました。……お仕事が何かは存じ上げませんが、掃除や洗濯といった家事でしたら微力ながらお手伝いできるかもしれません。精一杯頑張りますので、よろしければお連れください」

頭を垂れたままだった私の肩に、そつと温かく華奢な手が触れた。顔を上げると、優しいグレーの瞳で包むようにふわりと微笑む美女。

ああ……まるでマリア様みたいな聖女のように。

美しい彫刻に見惚れるようにうつとりと見上げた私の目の前で、慈愛深げな少し厚めの唇が、そつと開き……。

「何をおっしゃるのです、破壊の聖少女よ。憎き竜どもに尊い貴女様の頭を下げさせてしまったことに対する御叱責は、帰った後に甘んじてお受けしようとしておりました私に礼を述べられるなど。……誠にもつたいたなきことでございます。これほどまでに御慈悲深き貴女様にお仕えできること、無上の榮譽と喜びにございます。このエミエレ・スウイン、声と身と魂の全てを捧げて貴女様に膝を付き、この世界全ての竜を滅ぼすまでお仕え申し上げることを今ここに誓約致します」

……………どつやう。

現在唯一の味方である彼女の悲願と私の使命は、ぶち当たってその場で斬り合いをはじめめる勢いで真っ向から対立しているようだった。

11・ あなたと私の目的は。（後書き）

この作品が、少しでも。

あなた様に元氣や楽しみや心休まる時を、贈ることができますように。

君祈

12・ 私の生存率は。

居た堪れない。…… 実に、イタタマレナイ。

古さで軋む木目をさらした床の上。座った椅子の向かいには、何とか説き伏せ床ではなく椅子に座っていただいた聖女のような女性が、蕩けるように熱く潤んだ瞳で私を見つめていた。

まるで夢見るような恍惚としたその様には狂信が見え隠れしているものの、その危うげな美しさに…… 駄目ですっ、私、変なものに目覚めてしまいそうですっ！

しかも彼女は、私が悲願を叶える救世主だと信じきっているわけ
で。

実際には、私の願いは素晴らしいまでに彼女のそれと反目していることを知らない。

本当は今すぐにでも間違いを正したい。正したいのだけれど……
訂正した際に私が無事でいられる確率はどれくらいでしょうか？

約12時間前に別れた恩人のエミエさんが帰って来たのは、ロイヤルブルーの月（漆黒の夜空に浮かぶ様は、背筋が震えるほどの絶景だった）が本当に真上に昇った頃だった。

それから？お願いですから椅子に座ってください、とんでもございません床で十二分でございます？の一悶着の後、すぐさま彼女は己の身分、破壊の聖少女とは何か、何故私なのか等を語り始めた。

目の前に広げられている大学用力バンから出したルーズリーフは、びっしりと走り書きの汚い文字で埋め尽くされている。（エミエレさんには、この文字は読めないらしい。私はこちらの文字は日本語を読むように読めるけれど）

「エミエレさんについて」

母が人間、父が竜の？半竜？。父親は北の地を治める伯爵で、下級メイド長であった母に手を出し子を身籠ったことがわかると外聞のために町外れに家を与え捨てた。（竜はすべからず貴族等の支配階級であり、それに仕える人間を卑しい一族と蔑んでいる。竜と人の最も大きな差は魔力の有無であり、身体的にはほとんど差がなく見分け方としては瞳の虹彩が鋭く縦長であることくらい）

その後身重の母が暮らしはじめてすぐに、一人の男が現れた。男は出産から育児まで全ての身の回りの世話をすることを約束をし、ある 予言 について語った。そして男はその予言を現実とするための組織 一夜の揺り籠 ひとよのゆりご の長であると名乗った。母はその目的を知ると組織に加わり、エミエレさんを予言実現のために教育し育てた。

「予言と一夜の揺り籠について」

予言とは、約五百年前に唯一人間の味方についた竜が、夢に見た

未来について残した言い伝えである。その内容は、紺のワンピースに黒の編み上げブーツの黒髪黒目の年の頃十三程の少女が、アタサラ二公爵家に第二子として生まれる薄紫の竜の前に召喚され、その少女が竜の支配する苦しみの世界から救ってくれるというもの。

一夜の揺り籠 とは、芸術や学問・農業や職人の技術、商家の智慧といった人智を合わせ保護・切磋琢磨することを表向き目的とした組織であり、その実は極秘に伝わる予言を継承し現実のものとするため活動する集団。（一夜とは隠し名であり、本来は「人世」。つまり、竜を廃し人の世界を育む存在であることを示す）

「エミエレさんについて2」

予言にはもう一つ大きなパートがあり、それが「爵位ある竜と人の間に生まれし深緑の髪に灰の瞳の娘が、遣わされた破壊を掲げる聖なる少女を助ける」というものである。

そのため、エミエレさんは約30年ほど前にこの屋敷にメイドとして入り、それからこの時を待ち続けて来た。（この館のメイド服がこのデザインになったのは、公爵家の第二子が薄紫の竜であったことがわかり 一夜の揺り籠 が策を弄して専属デザイナーとなつて予言の竜が残した絵のデザインを提案したため）

「破壊の聖少女とは、何故私か」

少女については予言の欄に記。理由は、私が予言の通りに現れたため。

「竜の支配について」

竜は、大陸で最も大きなこの国でさえ200程のごく少数しか存在しない。彼らは皇帝（もちろん竜。最も強い魔力の竜になる）から爵位を与えられ皇帝の意に従い分けられた土地を治めている。

しかし先代皇帝から人は道具や下僕くらいの認識で、ほとんどの民が苦しい治政にあえいでいる。

かといって、人間になく竜にあるものは魔力と竜体くらいのもので、建築や生産といった技術は全て人間が成してきたものである。

ここまで話し終わった後の状況が、冒頭になる。

エミエレさんは、一度として「貴女は本当に破壊の聖少女か」「竜を滅し救ってくれるのか」とは問うていない。ただただ、宿願が叶った者だけが出来る充足と高揚が最高潮にある紅く染まった顔で見つめるだけだ。

私はそのあまりの喜び様に、竜癒がこの世界に必要とされた理由を理解した。

私が来なければ竜が滅びるというのは、つまり。

我慢に我慢を重ねた堪忍袋の緒も頭の血管も怒りにぶち切れた人間が、憎つくきバカ共を倒すため反乱を起こすからだ。……間違いない。

正直なんかもうとりあえず、一度竜もきつういお灸を据えてもらえばいいと思うね、私は。私にとっては可愛い、助けに来た竜だけど、痛い目みないと分からないことって、あると思う。

でも、そうも言ってられないのが現実だ。

なぜなら、そりゃ叱るのも大事だけど、このままだとお尻ペンペンではなく竜はそろってギロチン行きなのだから。

それだけは阻止しなければ。けれど、苦しむ人も助けたい。

そこで私は、エミエレさんが帰ってくるまでの待ち時間に唸って蹲つずくまって砂糖菓子をいただいて考え抜いた（糖分は思考の母なんだっ）答えを提示した。

悲惨なまでに噛み合わない目的を持つ私たちでも、手に手を取り合って協力するために。

「エミエレさん。私は、きっと竜の悪政を？終わらせる？ために努力します。ですからどうか、これから助けてください。お願いします！」

立ち上がって頭を下げた私に、エミエレさんはとうとう顔を覆って泣き始めた。

一方、頭を90度で下げ続ける私はその身で体言する通り、内心怒涛の勢いで謝り倒していた。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ほんとにごめんなさいでも嘘じゃないんです、ただ竜を滅ぼす気がないだけで、性格をフルボッコにしても矯正して必ずいい領主にしますから、なんか上手いこと言ってほんつとごめんなさい、全部終わったら正直にお話して土下座で謝ります、ほんとうにごめんなさいっ！

とてつもない罪悪感に心はのた打ち回るも、私にはどうしても真実を伝えられない理由があった。

実は、メモは取っていないが、私はある質問をしていた。秘密はどうやって守ってきたのって。

そしたらね、彼女こう言うんだよ。

情報を知りつつ組織に入ることを拒否した者には牢獄を、抜けるものには死を って。

つまり。

私がもしも目的を明かしたならば、無事でいられる確立は飛行機が墜落する可能性とどっこいどっこいか……それ以下。

12・ 私の生存率は。（後書き）

本日から2、3日連続で更新したい野望を抱いております君祈です。

力を振り絞り、あなた様に元気を産地直送っ！

13 . その方法は。

夜明け間際の、まだ青暗い空。

美しい、徹夜明けの暁に。私たちは今後の行動計画を完成させると同時に頷き、手を取り合った。

それから、もう仕事だと言う彼女と温かい紅茶と軽食を摂り、ドア口にて見送る。

さあ、マナカ。

優しいエミエさんには絶対に睡眠をとわれたけれど、閉まった扉の前で両手を合わせて謝ったら、すぐさま行動に移らなくては。この三十年、代わりをしながら今か今かと私を待っていただろうメイド服に着替え膝まである黒の編み上げブーツに履き替えた。万が一誰かがこの部屋に来た際メイド見習いだと名乗るためのカモフラージュなのだが、何故こうもサイズがぴったりなのだろうか。いや、そんなことは今はどうでもいい。

私がしなければいけないこと、それは。

目の前に山と積まれた？歴史・文化・マナー・貴族の家名と人名？について書かれた本を余すことなく不出来な脳にインプットすること。

ただ、この一点のみなのだから。

トイレ休憩以外机に向かい続けてお昼を過ぎた頃、お腹がどうにも鳴りはじめ渋々走らせていたペンを止めた。両腕を突き上げてぼきぼきと鳴る背中を思い切り伸ばした時、どこかで見たような熱く潤んだ瞳で胸の前で手を組みこちらを見つめる真横の男性に驚き過ぎた私は、背もたれのない椅子から伸びをした勢いそのままに見事に後ろへ転げ落ちた。

……最近こんなのばかりな気がするのは、気のせいか……？
いや、気のせいでしょう！ 違った、気のせいなんだ！ どわっ！
なんておっさんのような悲鳴が飛び出たのも、間違いなく気のせいなんだっ。

まるで家宝が壊れたように青ざめて駆け寄ってくれた同年代の青年に助け上げてもらいながら、私はやけくそで己に言い聞かせ、立ち上がると早々に自己紹介をした。

引きずらない。私は、引きずらない女。

「あ、の。驚いてすみませんでした。集中すると周りに気づけない悪癖のために、出迎えもできずにごめんなさい。助けていただいて有難うございました。私は、ヤマイ・マナカと言います。どうか、マナカと呼んでください。これから、勉学やマナー、衣食住と何から何までお世話になりますが、どうか、よろしくお願い致します」
「……………っ！ おっ、おかつ、お顔をっ御尊顔を上げくさいませ！ 私のような者に、どうかその様なことを……っ！ このような若輩者が聖少女様のお近くにいることさえ身に余りある榮譽でございまっ、申し遅れました！ 私、下級メイド見習いの指導を務めます、ウェルシュと申します！ 聖少じっ、マナカ様お相手

に教鞭を振るうなど卑しき私には平伏してもおこがましきことです
が、貴女様の手足となり剣盾となり下僕となりてお仕えすることを
ここに誓願申し上げ」

ぐうーっ。

………そうかい。わかった。もういい。もう、いいよ。

恥をさらすのが私の標準装備だと、涙を飲んで認めます。

だから、お願い。かなり行きすぎだけど心の籠った人様のせつか
くの口上の間くらい黙っていてくれ、私の腹。

* * *

私はまず、ここで下級メイドとして働きこの世界と竜の現状につ
いて知ることにした。

そのためにエミエさんと私が立てた計画の流れは、こうだ。

はじめに、下級メイドの棟ではなく街に移住すること。それから、
そこで下級メイドになるための知識や教養を身につける。その間に、
エミエさんたちは私の身分の作成と最重要幹部にのみ聖少女が現

れたという連絡をし、この屋敷へ下級メイドとして潜り込むための手続きを行う。

この両方が終わった後に、この世界で始めて出会った存在であり十中八九 竜癒が救うべき竜 だと推測される薄紫の高飛車竜、アタサラニ・アム・イレイユの傍に仕える見習い下級メイドとして参上するわけだ。

でも本当は。

してもらえばっかりで何一つお返しすることが出来ず、元より私にそんな価値があるのか本当に結果が残せるのかという苦しい問いと申し訳なさでもうすでに頭がいっぱいだ。

けれど、かと言って知識もなく生活もできない私が御好意をお断りしていい立場でない。

……だから。

素直に感謝すること、元気で明るく私らしくいること、諦めず努力し続けること。

たぶん、私がすべきこともできることも、まずはこれくらいなんだ。

だから、これだけは死んでも貫き通す。

屋敷を出て街中にあるウエルシュさんのお家へ向かう途中の馬車の中、緊張で石のように固まったウエルシュさんとお話しながら私が誓ったのは、そんなことだった。

「本日はお話していた通り、全ての科目に一通り手をつけていただき聖少じ、……マツナ力様の現在の状態をお教えいただきたく存じまふッ！」

昨夜夜遅くに彼の自宅であるこの屋敷に到着し、それから豪華な食事をいただいて身支度をするとう倒れるように眠った。約五時間の睡眠の後、勉強に励んでいた私の部屋へ先生ことウエルシュさんが訪れた。

大きな机を挟んで立つ彼は、二十歳を過ぎたばかりの厳かな感じがする金髪碧眼の格好いい青年で、今日もやたら噛んでいる。どうしても私を名前前で呼ぶことに抵抗があるらしく、その余波が語尾にまで現れていた。……ものすごく、親近感。

「は、ごぼつ、えゝつ、では。まずは、歴史から。こちらが、この国の歴史を最も簡略化した書類でございます。いかがですか、見覚えのある点などございますでしょうか」
「……………いいえ、まったく」

原稿用紙2枚半程度を流し読む。約1500年前から先帝の統治が始まり、巨大な国となったこと等が書かれている。が、その中に知っている部分はなかった。私がこの二日必死で学んでいたのは、先帝よりも遙か昔の、神代の世界創造物語だったから。

こんな感じで「歴史」以外の「礼儀作法・メイドの仕事・一般教養」も知識の程度や行動できるかを確認された。

数時間が経ち、現状を把握するとウエルシュさんはてきぱきと今後の教育予定が組み上げていった。

一般教養の最後の項目、見せられた地図にわかりませんとぼつちり言い切ると、ようやっと最後の科目の審判に移った。

「かしこま……わっ、わっか、わかりました！ 最後に、？その他？です。これも、初歩的なものを文書に短くまとめました。御覧く！ う！ むっ！ みっ、見てえくだしやい！」

せめて一般的な敬語でお話したいとお願いしたら断固として拒否されたが、今後メイドとして屋敷に出たら彼は上司だ。そのことを伝えると、ひとしきり悶えた後彼はこうなった。

先を見据え重すぎる苦渋の判断（彼にとつては）をした大人に対して失礼この上ないが、努力賞と共に？かわいそかわいいで？賞の授賞式が、私の頭の中で盛大に行われた。あいらぶウエルシュ。

癒されるなあと思いつつも、せめてもの敬意を表すために献上するように恭しく差し出された冊子を取って、目を通した。

「……1、竜に跪くことの精神的苦痛に対処可能かを見る。2、着替え、給仕、掃除、その他の命令や蔑みを受けても顔に出さず仕える生き地獄を耐え抜く鋼の精神を得るためには……？」

今まで全ての要約が原稿用紙2枚半程であつたにも関わらず、これだけやたら分厚かった。……3枚目4枚目をめくり、ゴサッと飛ばして、最後のページには18の数字。

……うん、わかった。わかったよ。それだけ、竜が嫌いなんだね。そこまで、嫌いなんだね。

今までの2枚半の縛りをぶち抜いて、約4倍の文量にしないと伝えられないくらいに。

「あゝ、えゝゝつと。私は、大丈夫です。問題なく耐えられると思います。ウエルシュさんは、竜のどんな所が嫌いですか？」

「ど……………どんなトコロ…………？」

人にとってどんなところが竜に嫌われるのか、何か今後の手がかりになるかもしれないと思い軽い気持ちで聞いてみた。

とたんにふらり、と師はよろけ。

「いま、どんなトコロとおっしゃりましたか聖少女様っ！ あの時、あのおぞましい瞳と醜い竜体を持った、悪魔の種族の、どこがとっ！！ そのようなこと……………例え聖少女様であられましても、そのような愚かなことはお聞きになってはなりません！ 奴らの全てがあああああ」

机の上に立ち上がって絶叫しはじめた彼は、もはや私を見ていなかった。

いったい、ここまで嫌われた竜と人をどうやって近づけたらいんだろっね。

書類も蹴散らし地団太を踏む彼がひっくり返らないように必死で机を押さえつけながら、私は途方にくれるばかりだった。

13・ その方法は。（後書き）

いつもお気に入りや評価、本当に有難うございます。

私こそ元気をいただいている身だと痛感しておりますが、少しでも恩返しができるようにこれからも努めてまいります！

14 . 背に受ける視線の色は。

異世界三日目の深夜。月が真上に昇る頃。

今日は朝から現状について検査したが、結果は思わず良好だった。なぜなら、挨拶からテーブルマナーにいたるまでの礼儀作法も、洗濯や掃除・着替えの手伝いといったメイドの仕事も、一般教養になるダンスや花、お茶などの知識も私の世界のものとほぼ同じで、実際に通じるレベルと判断されたからだ。

あとの歴史と？その他？については、まあ、言及する必要はないだろう。

勉強机の前の壁に貼り付けた、出来立て手作りの予定表は五つの色で、「歴史・礼儀作法・メイドの仕事・一般教養・その他」に分けられている。

携帯を取り出してぱちりと写メで記録し、今後の確認のために保存した。

それからいただいた屋敷内用ドレスから馴染みの紺のワンピースに着替え、使っていた筆記用具とノートをカバンに詰めて担ぎ、与えてもらった裕福な商家では一般的だとされる広々とした部屋に一礼をする。

それから服の中に入れてあった体温の移ったお守りのセイのカケラを握り締め、口笛を鳴らした。

「……………た、ただいま、セイ」

近い。思ったより近かった。一瞬、白界の白い床とセイの見分けがつかないくらいに近かった。
それに。

……………愛歌、おかえり

会いたかったと擦り寄る彼は、やたら巨大だった。巨大すぎて、どんなポーズで私を出迎えてくれたのか推測さえできない。見えるのは、360度の真珠色と瞳の七色だけ。
なんで巨大化してるの？ あれ、もしかしてこれが本来の姿？

……………疲れたのか？

黙ったまま考え込んでしまった私を心配し癒すように触れようした彼は、こちらへ首をのびした。とたんに。

ムウギユ！

彼の頭らしきものは、私を包むように囲んだ鱗の壁にぶつかり変な音を立てて詰まった。

え？

「……………詰まって……………詰まった、の？ 自分の体に？」

なんだそれは。 天然だ！ 天然がここにいるっ！ そんな芸当見たことない！

お腹を抱えてうずくまり、遠慮もなしにげらげら笑った。笑うのが久々なことも忘れて。

ああ、なんて可愛くて愛しい生き物だろう。

体が……邪魔だ

が、私の大笑いも長くは続かなかった。
ぼそりとのたまった竜様が、今度は生木の裂けるような恐ろしい音を立てて頭を押し進めたからだ。

「セ、な、ぎゃああああ！ まって、待って止まって！！ なしなし、それはなしっ！ 落ち着いてっ！ 小さく、小さくなればいいからああああ」

真っ青になった顔の前で腕をクロスさせ大きくバツを作ったり、掌を突き出して必死の静止を試みる。

竜様の天然具合は、洒落にならんかった。

* * *

約半日一緒に休憩と称してだらだら過ごした後、一度元の世界に帰ることにした。

「戻る方法は、同じだ。送るとまた揺れる、気をつける」

「うん。紅茶、おいしかった。ありがとね。あと明日のお昼には、またお願いすると思う。……それじゃ、いつてきます」

僅かに背伸びをしてセイの額に言ってきますの挨拶。それからにつこり笑った。

と、膝がつくんの衝撃の後、そこはいつものバス停だった。

「は……はや……」

あまりの変化に状況を処理しきれない頭がくらくらする。ふらりとよめけば、列を作る冷たいポールに当たった。

その横をブオンと音を立て、約4日前お目当てだったはずのバスが止まる。

額を押さえ目を開けると、見慣れた変な緑一色の京都のバスに、なぜかものすごく帰ってきたことを実感した。

まるでスイッチが切り替わるように、それだけで時差呆けならぬ世界差呆けは簡単に克服され。

服の上からセイの欠片に触れて、ここ？数日？が夢じゃないことを確認する。

それからバスに乗り込むと、今度こそ？今日？の夕飯の献立を考えるのだと意気込んだ。

バスを降り、階段を上り、ちょっと歩いて、エスカレーターに乗ること数回。

いつもの待ち合わせの場所である、ビル内のこじんまりとした本屋に到着した。

すたたと競歩のような勢いで歩きながら、時計を確認。

うん、この時間ならまだ推理小説の新刊をチェックしている頃だ。私は唇を噛み締めて、さらに足を進めた。

「ソウヤ！」

「……マカ？」

予想したコーナーに見知った後姿を見つけて、思わず私は声を上げていた。

でも、体は湧き上がる感情に動けなくなつて。

しかも本屋くらい静かにしなよ、って呆れた声でやっぱり思った通りに言つて振り向くから。

「っ！ な、何があつた？！ どうして泣いてるっ」

駆け寄つて私を包もうとして、さらに驚いたように体を震わせた相棒に、涙をこぼしながら笑つてみせた。

* * *

「話せ」

あゝ、うん。ま、そうなるわな。いつも通り待ち合わせただけなのに、そこに号泣しながら幼馴染が現れたら。うん、そらそうなる。

けど、やっぱりもうちょつと言葉を長くするとか、語を足すとかして怖がらせないように気を遣ってもいいのではないかな殿下。

ほとんど抱きかかえられるような勢いで引かれ移動した先、到着したのは人気のない屋外の渡り廊下っぽい所だった。なんで、こんな場所まで把握してるんだろうね。この人は。

あ、ごめんわかった。話す、話すよ。だから、その顔で片眉だけ吊り上げて催促するのやめてください。

「あゝ、なんとも、実は。……えゝ……自分ではまったく気づいてなかったんだけど、ある竜^{ドラゴン}から受けた頼み事が、思いの他精神的緊張を要していたみたいで……ソウヤを見たらやたらほっとして泣けましたごめんなさい」

正直に、話した。

だって、全部話すわけにはいかなくても嘘ついても仕方ないし、……こいつに通じる精密な嘘を今ここで考えるのは私には不可能だ。

そして予想以上に長く続いた沈黙の後。

黒く染めた髪を掻き上げ、顔を逸らすとソウヤは息を吐いた。重い重い、私よりもよっぽど言葉にならない感情を吐き出すような。

あ、だめこれは……。

「ソウ、あのイダダダダッダアアー……！」

「やかましい。この、バカ。どうして、そう俺に迷惑ばかりかけるわけ？ 何のつもり？」

「むりい、無理無理会話ムリッ！ ゆうび！ 指刺さつとるっ！」

「アイアンクローってそういう技。ねえ、俺の握力のマックス知ってたよね」

「っ！ しらん！ そんな話は知らんからハナシてっ！ でるでる、耳からなにかぐわ！」

「そ？ 何が出るのかな。……面白ければ何出してもいいよ」

それから30分後。真っ赤になったこめかみをさらしながら。

無二の好物であるポルチーニ茸のパスタ（ソウヤはきのこが嫌い）を夕飯とする許可を得て、私は痛みも忘れてニコニコとそれはご機嫌に数日分の食材を鼻歌と共に買い込んだ。

そんな私の後ろを、苦渋に満ちた瞳で見つめているソウヤに気づきもしないで。

14 .

背に受ける視線の色は。(後書き)

15・ 唯一つの願いは。（前書き）

祝。お気に入り700件、1800pt超え！ 大感謝っ！

御礼のいちやいちや短編orちよつとネタバレ残りの竜の自己紹介を企画しております。出来上がったら、活動報告にでも。

意味深な15話、はじまります！

15・ 唯一つの願いは。

大量の食材と飲み物を長い腕で軽々と持つ殿下の隣、菓子パンの袋とデザートのだーナッツの箱を揺らしながら徒歩5分で帰宅した。隣室に住む幼馴染はそのまま私の後ろに続き台所に荷物を置くと、今必要ない分の食材を冷蔵庫（弟が増え先日さらに二周りほど大きくなった）に詰め込んでゆく。

お昼を適当に作って、その間に半分になったドーナッツに「ああ、しかも私のポンデまでやられている！」と地団駄を踏んだ所を、うるさい猫でも扱うように腕一本で運ばれ椅子に座らされた。抗議する間もなく、焼き鮭と味噌汁とお漬物と淹れた覚えのない日本茶が目の前に出され。

急に大人しくなった私の向かいに座った殿下がくすりと笑ったが、断じてソウヤが気が向いた時にしか淹れないお茶がおいしいと知っているから許したわけじゃない。断じて、まんまと餌に釣られたわけじゃない。

「……おいし」

ああ、今日も日本の茶がうまい。

「ただいまあー、ねーちゃん。ついでにソウも」

「あ、おかえりー、クウちゃん。ごはん出来てるから、手洗いとうがいしておいで」

10日程前からこちらに住み今年の春から京都の大学に通うよう

になる年子の弟縮人（通称、クウ）は、ういゝと気の抜けた返事を返し素直に台所へ向かった。かと思ったら、奇声を上げ始めた。どうやらクウが手を洗いに行った所、配膳の傍らタクトの分の焼き鮭にソースをかけようとしていたソウヤを怒っているらしい。そそくさといつもは私がする配膳をやりはじめたかと思ったら殿下よ、つまらんことを。ほんとに、今日も楽しそうだね、君たち。お姉ちゃん、とっても嬉しいです。

「ケチャップもマスタードも駄目だっ！ これは、塩鮭！ 鮭の旨味を塩で……ち、チーズを持って追いかけてくるなっ」
「はいはい、大丈夫よ。後で買ってきたカレーパンに乗せてチンしたいだけでしょ。ほら、食べよ」

手を合わせて3人仲良く？いただきます？を言えば、楽しい昼食のはじまりだ。

バイトの合間、昼食を家で食べるために帰ってきた弟を送り出しソウヤと二人で片づけをこなす。

洗うのがソウヤで、私は皿を拭くのと棚に戻すのが担当。それは、父が自ら行動で示しているように我が家の習いだ。何かと手を傷める家事をこなす女性のために、食後の皿くらいは男が洗うのだと。

そもそも、私の父はフランスで10歳から育ち腕を磨いた料理人、母は15歳からイタリアで歌を学んでいた音楽家っぽい人で、イギリス旅行中に出会い結婚した。そんな彼らは、？外国と日本のいいところを合わせた教育？をモットーにしているらしい。

愛情表現については結婚当初から海外式が採用され？たくさんする、恥ずかしげもなくする？が、家訓とされた。

そのため、どんな人にも経験あるだろう「え、これって普通じゃないの？ 違う？ うちだけ？ …… そうだったのかああ！」を異様に人より多く叫ぶ子供時代だった。

いいんだ、でも。家族が仲良いから。それで。

片付けと共に遠い目が終わったのは、午後1時を少し過ぎた頃だった。

「マカ、今日も上賀茂神社まで行く？」

「うん、もちろん。それから北山まで歩いて…… あ、でもプールもいいかも」

「…… プールはこないだ行っただろ、気分じゃない。用意も面倒だし、帰りお前寝るし。…… クレームブリュレとパフェ」

「乗ったああ！ いざ北山へ！ もう逃がさない私のデザートッ！」

箱に半分残ったドーナッツも片付けの間に弟に全て貪り食われた私は、獲物を見つけた狩人のように目を光らせて部屋を飛び出した。午後は自由時間として取ってある水曜日は、散歩とか運動をするところが習慣だが。

今日は上賀茂はないみたいだね、と部屋の鍵をかける幼馴染を急かして、さあ北山通りの可愛いデザート店を梯子するのだ！

* * *

「た……ただいま……。おい、ねーちゃんごめん、これお詫び……」

「あ、クウちゃんおかえり〜！ 見て見てっ、お夕飯はポルチーニのパスタなの！ クリームベースで、ソースたくさん作ったから明日リゾットをお弁当にしてやらんこともないぞよっ」

昼はバイトを理由に逃げるように……逃げるために部屋を出たものの、楽しみにしていたドーナッツ喪失への姉上の怒りはどれほどか。

恐る恐るドアを開けた先、予想に反しご機嫌もご機嫌で麺を湯がくその人がいた。

俺は迷わず、ソファでくつろぎ本を読む救世主に近寄った。

「助かった」

「貸し一つ」

謹んで姉へのご機嫌取りに買って来たケーキを進呈すれば、「ま、いいか」と納めてもらえた。良かった、こいつに貸しなんて危なすぎる。

交渉成立ということで見たまま上がったソウの手にパンと合わせ、俺も隣りに座った。

かわいい姉の機嫌が良いならば、今日も我が家は幸せだ。

「出来たよ〜。うふふ、きのこたあつぷり！ 味見もばあつちり！ あ、ポルチャー二減ってたらごめん。ソウヤは同じクリームソースで昼の鮭とイクラの Pasta にしましたあ」

「ありがと」

「うつつ腹減った。ねーちゃん、飲み物いつものでいいよな」

きのこ嫌いかつ魚好きの殿下のための別口ソースをかけて、ジンジャーエールを注いでもらって、よし準備完了。

いただきますの合唱から瞬時に、お皿の中でフォークが舞い踊る。

ふっ、ふふふふふ、うふ、……うまい！

「……すげ、ヤバウマ。流石マカ姉、ことポルチャー二料理に関しては本職の親父をも上回る」

「愛、これが愛なのよ。愛してるのよ、ポルチャー二！」

「……結婚してもらえるといいね」

ソウヤの呆れた顔にもめげず、きつと純白のタキシードで隣りに立つポルチャー二は誰よりも素敵っ！ と返すと、「ヒョロイきのこヤローなんぞにねーちゃんはやらん。つか、俺に劣る男にはねーちゃんもキヨもやらん！」と妹の名も加え弟が、違った、シスコンが叫んだ。

「ソウヤは、鮭にウエディングドレスを着てもらって、海草の花束を……にやにふるにや」

「さあ、なんだろうね」

もう、可愛い冗談なのにお箸で口を挟まないでよね。Pastaまでお箸とフォークの二刀流め。

「ほんと、俺の姉に何するんだろっな」

あ、シスコンスイッチが入ったままだった。でもだからってお箸とフォークで戦いはじめるのやめてよね、君たち。

それにしてもクウには、ソウヤは本当にいい目標になってる。意地でも認めないけど、男の子ってそんなものだろう。とにかく、おかげでいい男に育ってくれて姉はすごく嬉しい。

でも、ライバル視のせいで毎回やるこの戦いが、たかがお箸やフォークを使うくせにやたら本格的な戦闘になるのはお姉ちゃんやめて欲しい。すぐくやめて欲しい。

くるりと手の中で回り鋭く突き出されたフォークが、流すように箸で軌道を逸らされ勢いが弱まった所をぴたりと挟まれ止まった。今日も、勝者は変わらないみたい。てか、お前らは何の達人だ。

「くそ！ 新技だったのにっ」

「甘いよ。手の内丸見え。回すなら……」

「麺がのびるよ、食べなさい。……異議があるなら、明日の家事放棄」

にこにこと、彼らが恐れる私の言葉（クウはマカ・スペルと呼ぶ）の一つを口にした。

とたんにカチンと二人同時に固まって、すぐさまガツガツとかきこみ始める。

うむ、家事オンチたちよ。素直でよろしい。

あと3杯は食べるだろう大食漢ズのために給仕をして、今日の話をして、笑って、食べる。それから後片付けは、洗うソウヤ、すすぐクウ、拭く私で狭い流し台にぎゅうぎゅう詰めになる。いつも通りで、何気なくて、最高の夕食。

君たちのお陰で、本当に私は今日も幸せです。

*
*
*

片付け後、いつもの如くソファでのんびりすることもなくソウヤは部屋に帰った。

大学は海外のどこかで飛び級していつの間にか卒業していた殿下は、私が大学にいる日中やおやすみと別れた後たぶん部屋に籠って仕事をしている。

これだけ長く一緒にいて？たぶん？しかわからないのは、ソウヤがこのことに関して触れられるのを極端に忌避しているからだ。

以前はそれがもどかしくてたまらなくて何度も揉めたけど、今は違う。

大事な私たちを巻き込みたくない気持ちと同時に、私たちには？
つらいことから離れて帰る場所？でいて欲しい、と願う気持ちがあつとわかるようになったからだ。

そこで私は、絶対に帰ってくると言うのであれば、どんな時でもいつもの如く迎え送り出す。でも万が一理由もなしに帰ってこなくなったら、世界の果てから引きずって蹴転がしてでも連れ帰ると誓った。

ソウヤの肩に今も残る大きすぎる傷跡が、強盗によるものではないと気づいた二年前の真夏の夜に。

「何そんなところで蹲^{つすくま}ってるの？ 寝るよ」

「っ！ ソウヤ？！ え、帰ったんじゃ……」

「帰った。で、戻った。ほら、寝るよ」

お風呂上りから何をするでもなくぼうつと座っていたソファから剥がされて、引きずられ様に歯を磨く弟におやすみを言うと、部屋に放り込まれた。

そのままさつさとベッドに倒れこんでソウヤは動かなくなる。

私はというと、ため息をついて明日の準備を済ませベッドの端側に横たわる殿下を跨いで壁との間に収まった。

「いつもより持つ荷物の量が少なかったのも、お昼にお茶淹れてくれたのも、いたずらしてクウに怒られてたけど配膳してくれたのも、デザートたくさん食べさせてくれたのも、夕飯キノコ三昧にさせてくれたのも、明日のケーキくれたのも、今一緒にいてくれるのも、ありがとう」

泣いたのを心配して、たくさん優しくしてくれてありがとう。

返事の代わりに額に落ちたいつもの感触に、私はそのまま久方ぶりにふわふわした微睡^{まじろ}みの中へ落ちていった。

だからこれは、私の知らない物語。

ふわりと、今日一番の幸せそうな笑顔を見せて、人騒がせな幼馴染はあつという間に眠りに落ちた。

何があつたか聞いた所で、こいつは口を割りやしないのは明らかだから自室に戻り調べた結果、こいつが泣きながら現れた程の何かは？俺関係のいざこざ？に巻き込まれたからじゃないことが判明した。その瞬間、無意識で振り下ろした拳がキーボードを叩き割る。残る可能性は、在り得るはずのない最悪の事態だけだった。

「ねえ……大事だなんて知ってるだろ……どうして、言わない。どうして、」

どうして……と重ねたあまりに震える小さな声は、掠^{かす}れて消え。

「——どうして、お前は俺の知らない竜の匂いがする……」

…」

声よりも震える手を必死で押さえつけても、何にもなりはしない。
滴り落ちる紅は、残された時間を伸ばす術にはならない。

夢。いつか、いつか、触れることもできない幻の如く消え失せる。

いとしい、愛しい、刹那の夢よ。

「……………竜を導くのは、俺だ」

わかっている。だからまだこの夢を、俺から奪わないでくれ。

16 . 泣かないのは。

「ほら、起きなよ。脇に頭突っ込んでないで」

朝7時。ゆつくりと目を開けると、左を下にして横向きに寝ていた俺の右腕と体の間に頭を挟んだマカの首から下のみが見える。

久々の現象だが、寝ている時まで変だなお前は。

こんなことされて起きない俺も、大概か。

「ん~~~~、ふう、あと……さんじゅっふん……」

「そこ普通は5分って言うんだよこの欲張り。ヨダレ、垂れてるよ」

本当は垂れてないが、さっさと起こすために嫌そうに言い放つ。
流石のマカもそれにはんぐんぐずりながら脇から頭を抜いて…
俺の右肩に口元を擦りつけた。

「……俺で拭くな」

目を閉じたまま満足そうに笑う小動物を、どうしてやろうか。
昨日のどこか張り詰めた空気は、もうその影さえ残っていない。
ただそばにいただけで、なんて。ほんと、安上がりな奴。

が、仮にもうら若き乙女が、ヨダレが垂れてると言われてその反応？

「ねえ、恥じらいはないわけ？」

「……にやい。しよせえ……ん、ソウヤ」

そのまま額を擦り付けて、また眠るマカに、俺は笑うしかない。

何もかも諦め全てから逃げ続けた日々を、その目一つで変えさせた。

憎しみと恐れと妬みと期待の眼差しだけしか知らぬ俺に、信じようがないほど優しい世界を見せた。

「……俺に所詮なんて言えるのは、お前くらいだよ」

？半分こ？なんて柔らかな言葉も、手を繋ぐ安堵も、静かな熱と吐息のそばで眠る幸福も。

教えられるのは、遥か昔からお前だけ。

この俺が 夢^{マカ} と呼び続ける、お前だけだ。

「歯ブラシ、ドリップコーヒー、おやつ、着替え、下着、手回し充電式懐中電灯、目薬、栄養ドリンク、化粧品……はよくて、ティッシュ箱、それから……」

あれよあれよと膨らんでゆく大きな旅行用バッグ。

朝8時に家を出て大学に行き、一度部屋に帰って昼食を取った後、あちらへ行くための準備をしていた。

なにせ18世紀程の文化だ。たった三日でもなくて困るものがたくさんあった。帰ったら必ず持つてこようと決めた物リストは、長い。

どうにかこうにか押し込んで壊れそうなファスナーを閉じ、コルクボードに「大学。一回生最後の授業！ 3限は音楽文化論、4限は中世ヨーロッパ概論だ、しっかりな！」と帰ってきた自分のための状況連絡とエールを貼り付け、出発の用意も万全。

ひゅるりと口笛を鳴らした。

「つとと。ただいま、……セイ？」

一瞬の浮遊感の後、見覚えのある白い宝石の壁。

なんで帰ってくると巨大竜になっているんだろう？ と不思議に思いながら私を見つめる七色を探す。けれどどこを見ても、上下左右360度透明真珠一色のみ。

え？ どういうこと？

「……………おかえり」

ようやっと聞こえてきた声は、上からなのか下からなのかもわか

らない。

まるで、大きめの部屋全体が振動して音を出しているみたいだ。
あ、なるほど。つまり。

「ね、……どうやって私のこと囲んでるの？」

「右手の甲に乗せて、それを体で包んでいる」

「……そっか。じゃあ、どうして囲んでるの？」

彼の顔があるであろう天井を見上げて問うも、答えはなかった。

無言。無言だ。でも、この空気はよく知っている。

曰く、「何故わからない。誰のせいだと思ってるんだ。アア？」である。

猛烈にご機嫌が悪いらしい。こういう時は、アレだ。流れの中で探るに限る。

「え、え……つと、ですね……。あ……お昼食べちゃったから、多少12時過ぎちゃったよね。そうだよな、ごめんね。え？ 違うの？ あっ、そうですよね……。うんうん、違う違うそうじゃないよね……。一緒に昼食べられなかった……。ことじゃないよね、もちろん、違うよね……。ああ……。あれかい？ お腹減って……。……。ないですよ、わかった。わかった。正直に言いますごめんなさい、わかりませんっ！」

探り切れなかった場合は、はじめから謝るより打撃が大きいか。どこぞの冒険物語のように間違える度に小さくなってゆく空間に、最後は堪らず謝罪を叫んだ。

けれど空間の縮小は止まることなく、あ、終わった……。と思いきり目をつぶったが、気づけばいつものごとく長い尾に包まれて小型竜様の足元に引き寄せられていた。

若干、いつもより尾の締め具合がきつい気がする。

……我が、お前を癒す

睨むような険しさで、七色の瞳の竜が唸る。

我が、竜を癒すお前を癒す

私に響く竜語とは別に、彼の喉から発せられた地を這うような低い音が私を揺する。

体は、生きているのを忘れたように固まって動かない。

我の、竜癒。我以外のものに癒されるな……

私にそのまま、届く竜の言葉。？悔しさ、嫉妬、苛立ち、羨望、恋しさ、焦り、不安、切なさ？。

ミキサ―で碎いて混ぜたような様々な感情たち。流れ込んでくる、たくさん。

——くらくらする。

我の元だけで、泣いて

すり寄ることもできずに震える、私の竜さま。
かわいい、いとしい、私だけの竜。

私は、セイがいれば泣くことなんて、忘れているだけなんだけど
ね。

17・ 選択は。(前書き)

お、お久しぶりでごめんなさい。
短くて、ごめんなさい。
お楽しみくだされば幸いです。

17・ 選択は。

必要な努力と、 unnecessary 努力の違いとは何だろうか。

そも、 unnecessary 努力などあるのだろうか。

依存と助け合いの差とは？ 合理的な排除と怠惰なサボリを隔てるものは？

……いや、本当はそんなもの、今の私には特に意味はないのではないだろうか。

選ぶべきことをただ真つ直ぐに選ぶこと、それ以外は。

私は、深く悩んでいた。うだうだとそれっぽい語り口調になっている己の脳内に、若干引きながら。

* * *

「記憶が過酷？ 必要な知識を持った――に触れて望めば、一瞬で得られるが」

ようやくと落ち着いたセイとの白界での休憩中、時間が惜しかった私は歴史書を開き血豆になりかけたペンだこを無視して文面の書き写しを再開させた。暗記ものは手も使わないと覚えられないからだが、鬼気迫り過ぎて目を血走らせている私を怯えるように見つめていた白竜サマには、私の行動も説明も不可解だったようだ。

うん。—— は、アレだ。その世界での私が関わるべき竜のことだ。で、……………で？

質問です。すぐさま必要な知識をとぉ~~~~つても簡単に怠惰に手に入れてしまうのと、頑固に自分のやり方にこだわって周りに無駄な時間という迷惑をかけてしまうのと、どちらが正しいでしょうか。

否。

私が、？今？取るべき選択は、どっちだ？

* * *

「失礼致します。先程下級侍女のサナが倒れその対応に下級侍女長エミエレが向かいましたので、急遽私マカがお手伝いに参りました。入ってもよろしいでしょうか」

ということで、女マナカ、ここから勝負です。

私、あの高飛車竜をお触りしに行ってきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8649q/>

竜癒の姫と五つの竜

2011年9月7日22時45分発行